

報道雑誌の見出しの文体特徴

宮 崎 彰 男

Stylistic Features of Journalistic English in the Heading

Akio MIYAZAKI

新聞や雑誌において使われている英語にはいくつかの興味深い特徴がある。その1つは、よく知られているように、見出しにおいて過去時や未来時に起こった事柄であってもほとんどの場合単純現在時制で表現されるということがある。これはスペースの問題からかなり必要に迫られた選択と行うことができる。これはもちろん時制を担う定形動詞を含む文という単位を使った場合のことであるが、与えられた所定のスペースでは述べたいことを表すのが困難であったり、またその他の理由¹で文の単位を使わない場合、見出しには名詞句などの句の単位が使われることが多い。²このような特徴は報道英語にとってかなり必要に迫られた、いわゆる制度化された慣習的特徴と考えることができるだろう。あるコンテキストにおいて使用される英語にとって制度化された慣習的特徴とはそれがその英語の規範の一部となっているということである。この小論で取り上げようとしている報道英語の特徴はそれに対して創造性に基いていると考えられる選択から生じる特徴である。この選択はかなり広い選択範囲からの選択に由来し、それ以外にほとんど選択の余地のない状況から出てくる慣習的な選択とは異なる性質のものである。以下、報道英語の慣習的ではなく、創造的な選択が比較的顕著に現れていると考えられる雑誌 *Time* と *Newsweek* から例を採りつつ、書き手が読者の注意を引くために見出しにおいて行おうとしている文体上の工夫を論じていく。

まず最初に視覚的效果をねらった見出しの例を挙げよう。³

(1) *Who Leads WHO?*

That is the question as an
unseemly row erupts over

the top doctor at the world's top health agency (Time, January 18, 1993)

これは国連の世界保健機関の最高責任者の椅子をめぐる記事の見出しと副見出しである。2期目5年間でねらう中嶋氏の立候補と彼のそれまでのいわゆる運営のまずさと指導性の欠如を批判する米国とヨーロッパが推すアルジェリアの Abdelmoumene 氏の立候補がこの記事の背後にある。見出しの *Who* と *WHO* は前者が最初の文字だけ大文字で後者はすべての文字が大文字であるという点で全く同じであるというわけではないが、視覚的には読者の目を引く見出しと言えよう。さらに、この例ではそれほど大きな役割を演じているとは言えないが、音韻的な特徴にも言及しておく必要がある。それはこの *WHO* という頭字語は NATO などと異なり、一般に1字1字その字の名称で発音されるが、時に疑問詞 *Who* と同じ発音をされることがあることである。⁴ そういう点から考えると、この見出しの文は書記面でほとんど同一の反復があるだけでなく、音韻面でも反復——この場合、全く同一の反復——があるということにな

る。このように書記面で——場合によっては音韻面でも——等価な項目を文構造の中の名詞句という対応する位置に配置していることは、それぞれの名詞句の文における機能が異なるにせよ、さらにこの見出しの等価的規則性を強固にすることになる。このような等価的規則性はその結果として当然のことながら、*Who* と *WHO* の意味面での結び付きを強めることになる。それによって今まさに勃発している最高責任者の問題とそれが問題となっている組織とが重ね合わせられていることを考慮すると、この見出しに観察される等価的規則性は形式的にその見出し自体を目立たせるように構造化されていると同時に、純然たる知的意味に加えてなんらかの含意⁵を伝達するように構造化されていると言えよう。⁶

次は同一の語の反復が見られる例である。

(2) *First Lady's First Job*

Hillary Rodham Clinton gets a tough

role bossing a health task force

(*Time*, February 8, 1993)

この記事は米国の医療制度の改革の責任者に大統領夫人になったことを報じている。この見出しでは *First* が繰り返されているが、別の観点からは先ほど述べたように単に同一の語の繰り返しではなく、語彙化した肩書 *First Lady* の構成素 *First* と名詞句 *First Job* の中の修飾語 *First* が繰り返されていると言えるだろう。そういう見方をすればここで起こっていることは、書記面と音韻面では全く同じ繰り返しがあるものの、単純な同一の語の反復ではない。つまり、肩書を表す語の一部にひっかけて語呂合わせのような結果を得るために *Job* を修飾する形容詞が選択されている。ここに書き手の表現上の工夫があると言えよう。

(2) はいくぶん語呂合わせ的なところがあったが、次の (3) はかなり典型的な語呂合わせが見られる。

(3) *Soul Mates in Seoul*

South Korea: President and industrialist

make common cause in 'self-development'

(*Newsweek*, November 1, 1993)

記事は韓国を変革し発展させようとしている大統領 Kim 氏が三星グループ会長の Lee 氏の書いた社員に強く勤労を説いた本を読んで共鳴し、彼の側近にその本を読むように勧めたこと、そして国家と会社という違いはあっても同じ志を抱く仲間であることを確かめ合うためであろうが、一緒に食事をしたということなどを伝えている。こういったことを伝える記事の見出しが (3) である。この例には (1) と (2) と異なり、等価な音韻は繰り返されているが、それぞれ異なる語であり、そして書記面も異なるという等価性の中へのヴァリエーションの組み込みが観察される。実際のところ、同じ単位の同一項目、あるいは一見して同じ単位と思える同一項目を繰り返すことはそれほど関心を引くものではない。いくらかヴァリエーションを伴った等価性を横軸に構造化するほうが読者にとっては興味深い。次の例はいくらかそのような構造化が見られる例である。

(4) *SORRY STATE OF SIEGE*

Yeltsin has a serious

mess on his hands as

the political crisis

refuses to end

(*Time*, October 11, 1993)

この見出しはロシアの政治的な混乱ぶりを述べている記事からであるが、見出しの名詞句を

形成する4つの語のうち3つが語頭に/s/を持っている。等価的規則性は語頭という語の音韻構造において対応する位置に起こっているだけではなく、リズムのレベルでも起こっている。英語のリズムは日本語と違って強勢が関与する。リズムの単位を構成する中心的要素は強強勢——つまり、第1強勢か第2強勢——である。1つの強強勢さえあればそれで1つのリズム単位が構成される。しかし実際には、それに弱強勢——つまり、第3強勢や第4強勢——がいくつか後続するのが普通である。このように1つの強強勢を基本としている英語のリズム単位はその中に含まれる弱強勢の数に関係なく、ほぼ同じ時間をかけて音声化される。言い換えれば、強勢の数だけある音節数には関係なく、ほぼ同じ時間をかけて音声化されるということである。この点、どのような音節であっても音節にほぼ等しい時間をかけて音声化される日本語のリズムの仕組みとは異なっている。

さて、(4)においてSORRYは2つの音節から成り、その第1音節に強強勢そして第2音節に弱強勢が、STATEは1つの音節から成り、その音節に強強勢が、OFは1つの音節から成り、その音節に弱強勢が、SIEGEは1つの音節から成り、その音節に強強勢が落ちている。それ故、この見出しはSOR-(強)RY(弱)STATE(強)OF(弱)SIEGE(強)という規則的な反復が存在する。先に語頭という語の音韻構造面に対応する位置に/s/が置かれていることによる等価的規則性に言及したが、いま述べたことから、/s/が強弱強弱強という強勢を持つ音節の配列において強強勢を担う音節主音の前の位置に置かれていることによる規則性がさらに上載せられていることがわかる。

このような規則的反復はもちろん第1義的には書き手の側に雑誌を手にする読者の注意を引こうとする意図がある。そのような意図の達成は規則的反復に加えて見出しのレイアウトによっても試みられることがある。

(5) STRESS

AND

STRAINS

(*Newsweek*, July 31, 1995)

これは米国と韓国の関係を扱ったこの号の最初の記事の収録を示すために表紙に表れた見出しである。韓国大統領が訪米するにあたり、朝鮮戦争以来同盟国である両国の間に現在生じているといわれる諸問題——例えば、朝鮮半島問題をめぐる主導権——が記事では扱われている。3語から成るこの見出しはまさにそのような関係の状況を意味化あるいは言語化しているわけである。これは名詞句+接続詞+名詞句という構造をとっているが、その中に現れている2つの名詞句は、名詞句構造が理論的には決定詞+名詞、決定詞+形容詞+名詞、あるいは関係節を後続させる構造など無限にあるにもかかわらず、単一の名詞から構成されている。このような同じ選択の繰り返しの下でそれぞれの名詞句は語頭が/str/である語を置いている。音節構造とリズムの面から言えば、両語とも単音節から成っており、それぞれ強強勢を受ける音節主音の前に同じ子音群/str/が置かれている。また、これらの語は語尾に/s/と/z/という摩擦音を持っているが、これは語頭の摩擦音/s/と閉鎖音/t/とともに、調音的にはどちらかと言うとエネルギーを要求し、また聴覚的には滑らかというより硬い、ざらざらした印象を与える。そして、このようなSTRESSとSTRAINSがレイアウトによって行という書記面での単位においても対応関係にあるようにされている。これらの特徴は単に表面の形式にのみ係わっているわけではない。表面の形式に見られる等価項目間の規則性はそれらを結び付け、それらが表す基本的意味を補強するのである。両国の関係の現状を述べる記事の見出しにSTRESSと

STRAINSという語彙が選択され、ここに見られる重ね合わせるようなレイアウトの仕方が選択されているのはそのようなねらいがあつてのことである。

見出しのみならず副見出しにも等価性が現れることもよくあることである。次はそのような例の1つである。

(6) *The Hottest Import*

To Hit Japan

Is plutonium the country's fuel--or

folly--of the future?

(*Time*, January 18, 1993)

これは当時いろいろなマスメディアでよく報じられた、フランスから日本へのあかつき丸によるプルトニウム輸送に関する記事である。すぐ目につく繰返し——それはつまり対応する位置に同一あるいは類似の項目が出現しているということであるが——は見出しの1行目と2行目の2つ目の語の音節主音の前にある/h/である。この音素はTheとToが提供する弱音節の直後に位置しているという点でその反復はさらに強調されている。さらに/t/はこの見出しの2行で5回(Hottest, Import, To, Hit)生じているが、それらのうち3回は語尾においてである。副見出しにおいては語頭であるという点と音節主音に先行するという点で対応する位置に/f/が現れている。これらはこの記事が述べようとしている現実を言語化するときに行われている語の選択が決して偶然のものではないことを示している。語の選択と統語構造における語の配置は、語の持つ音韻構造や音節構造を活用し、そしてそれらの構造が横軸に並べられるときに生まれるリズムを活用して、その結果形式に等価性を顕在化させることに向かつて行われている。これまでの例は程度の差はあれ、このことを指向していると言えるだろう。項目間の等価性の顕在化は次の見出しでもよく現れている。これはオンラインネットワークによるショッピングに関する記事からの見出しである。

(7) *Buy by Wire*

(*Newsweek*, June 6, 1994)

この記事には現在まだ郵便による商品の販売と比較すれば全体として金額的な規模は小さいものの、オンラインネットワークを通じての通信販売はある分野では好調な滑り出しをしているという報告が含まれている。(7)にはこのことを表すかのような調子のよい軽快な響きを感じられる。*Buy*と*by*は語頭に同じ子音を持ち、それに同じ母音が後続している。この母音はさらに*Wire*においても現れている。また、子音はすべて有声音で、無声音とりわけ無声の摩擦音や破擦音は現れていない。郵送に比べて、家庭にあるコンピューターで気楽に即座に注文できる簡便さとは無関係とは思えない滑らかな調子がここには見られる。

さて、これまで観察してきた見出しの例の文体特徴は等価性とその規則性にあると言えよう。等価性はさまざまなレベルで見られ、例えば、語頭に同じ音韻を持つ語彙項目は相互に等価関係を成し、さらにその音韻が単に語頭にあるだけではなく、強強勢を受ける音節主音の前に出現している語彙項目も相互に等価関係を成す。さらに、このような条件に加えてその音韻が単独で音節主音の前に出現している語彙項目も相互に等価関係を成す。このように等価関係を成立させている等価性はいま述べたようにさまざまな点で見られ、その観点の限定に応じて等価性の度合いも変移すると言えるだろう。こういった等価関係にある項目の中から書き手は単一の項目を横軸の連鎖構造においてそれが統語的に入りうる位置に選択する。等価関係にある選択されなかった他の項目はその位置では顕在化されず、もしかしたらその位置で選択されたかもしれない縦軸の潜在的な項目となる。一方、規則性とは縦軸にある等価性を顕在化させるな

かで同様の選択を繰り返し横軸の対応する位置で行うときに生じる特徴である。そして、縦軸の等価性の度合いと横軸でそれぞれの等価項目が選択される位置の対応の度合いが規則性の程度を決めるのである。⁷

これまで観察してきた事例はいま述べたように縦軸において等価関係にある項目を横軸の連鎖において反復して選択し、このように選択することによって等価関係が表面に現れてくる事例であった。見出しにおける報道英語を見てみると、そこにはこのような選択による表現上の工夫と関連するところはあるが、いくらか異なる工夫が見られるのである。異なる点は大きく区別して2つあると思える。第1は等価性が横軸に実現されず、表面下にあるままであること、第2にその隠れている等価項目は、有声音とか無声音、閉鎖音とか摩擦音、あるいは名詞とか形容詞、さらには同音の意味のことなる語の類といった言語の体系的な可能性に係わる集合体の項目であるよりもむしろ既に誰かによってなされた発話あるいはその一部である場合が多いということである。次の見出しはこれを例証するものである。

(8) Will a Son Also Rise? (Time, November 15, 1993)

これは説教家ビリー・グラハムを扱った A Christian in Winter と題する記事の中の囲み記事の見出しである。そこではそれまで世界各地でさまざまな形態の会場で1億人以上の人々に福音を説いてきたグラハムであるが、いまなおはっきりとした後継者がいないという状況下で彼の2人の息子、とりわけそのうちの1人フランクリンに焦点が当てられている。彼が後継者となるかどうかはまだわからない。それを上のような見出しで表している。この見出しは、それを知っている読み手には米国の小説家ヘミングウェイの小説の表題 *The Sun Also Rises* を想起させる。見出しの Son は表面には現れていない同音の sun と等価関係にある。そして、この見出しは Will に導かれた疑問文で、決定詞が冠詞の a、動詞の形が違うということがあがあるが、a _____ Also Rise という連鎖は小説の表題を読者の言語経験に基づいて活性化させ、Son と Sun との等価関係をも確実なものにする。

同じような例をさらに2つ挙げておこう。

(9) West Side Glory

Jerome Robbins returns with the musical that was his
landmark and greatest success restaged as a ballet suite (Time, May 29, 1995)

(10) Labour's Love Lost

The sudden death of John Smith deprives the
opposition of its leader at a critical moment (Time, May 23, 1994)

(9) と (10) が現れている記事でどのようなことが述べられているかはそれぞれの副見出しでほぼ把握できるだろう。(9) の下に隠されているのはミュージカルの題名 West Side Story である。Glory は Story と同様に音節主音の前の子音群が起こる位置に2つの子音を持つ語である。(10) は Labour's と Love の現れている順序やその他の細かな点で違いはあるが、_____ Lost というコンテキストとそこに先程の2つの項目が現れていることが、シェークスピアの劇の題名 *Love's Labour's Lost* をその等価項目として活性化させる。いずれもこれらの見出しの表現はこのように等価性を潜在的に構築することによってそれらが表す意味以上の意味をも伝達しようとしている。

最後に、そこにある作用は(8)(9)(10)と本質的に類似しているが、隠れている等価項目の1部をそのまま使い、その結果、その等価項目を全体として活性化させると同時に見出し

それ自体をも読み手に再構成させると考えられる例を見ておこう。

(11) By Any Other Name

The Philippines: Will Ramos rewrite his job title? (Newsweek 18, 1995)

この見出しは、伝えられているところによると、6年の任期が1998年に終了するフィリピンのラモス大統領がそれ以後ももしかすると憲法が改正され、最高権力者の地位に留まり続けるかもしれないという記事に付けられている。つい最近フィリピンの国家安全保障協議会が提案した改正案では、大統領には儀礼的な地位が与えられ、実権は総理大臣に移るとのことである。さて、問題の By Any Other Name はシェークスピアの悲劇 *Romeo and Juliet* のジュリエットのよく知られている発話 “That which we call a rose / By any other name would smell as sweet.”⁸ の一部である。これを簡単に引用と言ってしまうとそれまでであるが、この見出しによってそれと等価関係にある彼女の発話が呼び起こされることになる。一方、それによってこの見出しは読者にその欠落部を補ってそれを完成することを要求する。1つの可能性として、The politician whom we now call the president by any other name would stay politically as powerful. と補完することができるかもしれない。このように等価項目の1部を活用することによって、その等価項目を喚起させ、さらにもとの表現を再構成させるということは(8)(9)(10)には見られなかった特徴である。

以上、見出しの具体的な事例を観察しつつ、報道英語の文体特徴を論じてきた。この観察から報道雑誌の見出しに見られる表現にいろいろ工夫が施されていることが明らかになったことと思われる。スペースの制限、そしてこの制限の中での読者の目を引くという要請、これらが書き手に選択関係にある縦軸の等価性を横軸の連鎖構造の上に移行させ、規則的なパターンを実現することに向かわせる。これは言語のさまざまなレベルの体系における等価項目の選択と連鎖構造におけるそれらの配置という点で読み手の言語能力に係わった意匠である。一方、書き手の実際の言語行為である会話や読書による言語経験、つまり言語運用からくる経験に係わる意匠も観察された。これらの意匠によって書き手はその表現それ自体にまず注目させる表現を構造化して読者の注意を引き、それによって読者に基本的意味だけではなくそれに上載せられた文体的意味をもスペースの限られた見出しで伝達しようとしているのである。このような上載せられた意味は個々の事例で明確に規定することは難しい場合が多いが、それが伝達されていることは否定できない。⁹ 以上、日常的脈絡において使用されている報道英語の見出しに焦点を絞りつつ、その特徴を明らかにしようと試みた。

注

- 1 例えば、活字のポイントを上げるというのもこのような理由の1つである。
- 2 インターネット上で提供される *Financial Times* の Americas (<http://www.ft.com/news/americas/>) のページで1995年9月12日(火)から9月18日(月)までの日曜日を除いた6日間の記事の見出しは次のとおりである。

Creditors seek \$2 bn from failed uranium empire
Colin Powell confronts rightwing republicans
AT&T joins Brazilian team
American internet group in plea over child porn
Sudden rise in US industrial output

Hillary becomes a non-person in Beijing

これらのうち4例が文の形式で時制は単純現在、2例は名詞句で表現されている。

- 3 以下の引用例において問題にする点をわかりやすくするため、その部分を斜字体で表記する。
- 4 WHOをその文字の名称で音声表記している辞書、または音声表記を記述していない辞書がほとんどであるが、『プログレッシブ英和中辞典』（東京：小学館，1987）には両方が示され、「[hu:]とも発音するが」文字の名称で発音するのが「よいとされている」と述べられている。
- 5 含意が何であるかは読者の解釈によってさまざまであろう。最高責任者（の椅子）と世界保健機関に係わっていることは少なくとも確かであるが、解釈しだいで情緒的いらだち、傍観者的な関心、重大な関心とかが含まれていると考えることができよう。
- 6 等価性による重ね合わせは副見出しの最後の行でも起こっている。名詞句 the top doctor と the world's top health agency での形容詞 top の繰返しは同じ効果を目指した選択であり、等価性の点で見出しを補強している。
- 7 プラハ言語学派の流れを組むヤコブソンは Roman Jakobson (1960), *Linguistics and Poetics*, in Thomas A. Sebeok (ed), *Style in Language* (Cambridge, Massachusetts: The M.I.T. Press), p. 358 でいくつかの言語機能を弁別しているが、そのうちの詩的機能について “*The poetic function projects the principle of equivalence from the axis of selection into the axis of combination.*” (原文斜字体) と述べている。「詩的機能」とは詩において特によく見られるということだけで詩に限られるわけではない。ここで論じている事例にはまさにこの機能が働いている。
- 8 John Dover Wilson (ed)(1955), *The New Shakespeare: Romeo and Juliet* (Cambridge: Cambridge University Press), p. 32. ジュリエットのこの発話は他のテキストでは少し異なっている。Wilbur L. Cross & Tucker Brooke (eds)(1993), *The Yale Shakespeare* (New York: Barnes & Noble), p. 911 によると、問題の発話は “.../By any other word...” で、name が word となっている。このテキストと関係付ければ、いま問題にしている見出しは隠れている等価項目をそのまま使っていないことになる。しかし、シェイクスピア専門の本文批評家は別にして、一般の英語話者の言語経験においては name のほうがより一般的であろう。
- 9 伝達の成否はもちろん読者の側にも同じ言語能力と言語経験が少なくともあることが前提となる。